

## 巻頭言 未来に向けて

平成二十六年（二〇一四）十一月に、全学科を対象とする「資料紹介特集号」が刊行された。七年間に亘り、本学図書館所蔵の稀覯本や重要な資料のみならず、研究者が独自に蒐集した資料を、写真・翻刻・解題あるいは解説によって紹介・刊行して、専門の研究者からは高い評価を受けた。

翻刻にはそれぞれ緻密な解題を付すことが求められ、御執筆をいただいた諸氏の、慎重かつ継続的な研究の積み重ねによって始めて成し得る労作の数々を世に問うこととなった。刊行を手がけた近代文化研究所編集室にとっても、原資料との照合や活字の選択に始まる校正作業は一瞬たりとも気の抜けないものであった。けれども、刊行の度に、物言わぬ紙上の過去が甦り、活字の背後から洩れてくる光を見た時の感動は無量であったという。

そびえ立つ富士には長い裾野がある。一つの資料紹介には、その資料をどのように捕らえるか、長い時間をかけた綿密な調査が必要である。研究者は、若くても人生の年輪を重ねていても、出会った資料を奥深くまで追究する。不明であった物事のもつれた糸がほどけ、また繋がり、これを繰り返すことで視界が開けて行く喜びは何にも替え難い。本居宣長が『古事記』の研究に本格的に着手したのは明和元年（一七六四）である。『古事記傳』が完成したのは寛政十年（一七九八）で、三十五年の歳月を要し、宣長は六十九歳に達していた。その学問の成果は今もなお色あせない。古いものを見ると現代人から剥落した膨大な情報量に気づかされる。どんなに小さな断片にも想像以上の意味が付着していることがある。『古事記傳』全巻を摺筆した宣長は『うひ山ぶみ』の中で、「詮ずるところ學問は、ただ年月長く倦ずおこたらずして、はげみつとむるぞ肝要にて、學びやうは、いかやうにてもよかるべく、さのみかゝるまじきこと也」と、後進を励ました。

来年度以降も「學苑」において未だ発掘されていないことが開陳され、文学・歴史研究だけでなく、海外諸地域にも目を引き渡らせた諸分野に跨る知見の展開が期待される。残念ながら今号をもって「資料紹介特集号」シリーズは幕を閉じるが、この深遠な学灯を絶やすことなく、今後も引き継がれていくことを強く願ってやまない。

（鳥谷 知子）